

元暦二年七月九日(1185年8月6日)の京都地震について

三雲 健

「京都・岡崎年代史」(京都岡崎魅力づくり推進協議会編, 2013)には、この大地震についての簡単な記述があるが、史料によりかなり詳細な被害状況が明らかになって来たので、以下にその地震被害についての重要な部分を紹介したい。

京都・岡崎地区は、平安時代末期の元暦二年(1185年)七月九日に発生した京都大地震によって、当時この地区に建立されていた法勝寺をはじめとする巨大寺院群が壊滅的被害を受けた。それ以後この地区は衰微したと云われている。この大地震の震源地は当初は、京都盆地東北部(35.0. .N, 135.8 E)、この地震のマグニチュードはM7.4と推定されていた(宇佐美、1996)。

しかし、その後の詳細な文献資料の分析(西山、1998, 2000, 2001)によって、震源地はこの地域ではなく、むしろ琵琶湖西岸付近と考えられるに至っている。しかし京都・岡崎地区が大きい被害を受けたことに変わりはなく、この地域や周辺地域の被害について、西山論文に延べられている内容を以下に要約する。この論文は、当時の有力公家達の日記{「山槐記」}(中山忠親)、{「玉葉」}(九条兼実)、{「吉記」}(吉田経房)のほか、{「愚管抄」}(慈円)、{「醍醐寺雑事記」}、{「百鍊抄」}などの詳細な調査にもとづく長文である。1998年論文は「京都地震の被害実態」として当時の京都盆地内の被害を詳述し、2000年論文は、山科、宇治、比叡山など京都盆地周辺と、さらに近江、奈良、大坂地域などでの被害調査の結果を含んでいる。

「なお2001年論文は1998年論文の要約である。」

1. 京都・白河での被害

鴨川東岸のこの地には1070-1140年代にかけて、当時「六勝寺」と称せられた法勝寺をはじめ最勝寺、円勝寺、成勝寺、尊勝寺、延勝寺のほか、蓮華蔵院、得長寿院、宝荘蔵院などの御願寺が建立されていた。これらの寺院の位置については西山論文(1998) p. 20 に示されている。

このうち最大の法勝寺ではこの地震の際、境内の八角九重塔(高さ約82m, 基礎部分の一辺(12.5-14.5m)の上部の屋根瓦、屋根板などすべてが落下し、相輪の上部も折れて落下するなどの大きい被害を受けたが、大塔自体は倒壊には至らなかった。この大塔の正確な位置については2013年、京都市立動物園内で行われた京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査でその基礎部分が明らかにされた。

当時の公家達の日記{「山槐記」}や{「玉葉」}などの記述によれば、法勝寺境内ではこの大塔の被害に加え、金堂廻廊、鐘楼、阿弥陀堂、北門などが顛倒したほか、ほとんどの築地塀などが倒壊した。またこの西側の尊勝寺では講堂、五大堂、四面築垣、西門などが倒壊、この両者の間にあった最勝寺では薬師堂、三面築垣などが倒壊、また円勝寺でも築地が倒壊したほか五重塔の宝輪が破損した。このほか、さらに西側に位置した寺院のうち、得長寿院内の千体観音像を安置していた三十三間堂(瓦葺; 長さ約109m)が倒壊したことが記されている。これ以外の寺院でも史料に記載されなかった多数の被害があったことが考えられる。

2. 京都東山での被害

鴨川東岸の白河地区よりさらに南側のこの地域には、法住寺殿、蓮華王院、最勝光院などが造営されていた。このうち最勝光院では北釣殿廊下の顛倒などの被害を受けたほか、多くの建物が傾いたり、部分的な破損を生じた。このほか、蓮華王院でも多くの堂舎で被害が生じた。またこれらの南側に隣接する新熊野神社では廻廊が倒壊したが、そのほかの建物は無事であった。

3. 市中の被害

左京の鴨川沿いの法成寺においては、廻廊と東面の築地塀がすべて顛倒したほか、その他の建物においても大きい被害を生じた。〔「山槐記」〕や〔「玉葉」〕によれば、当時の公家の市中の邸宅のなかで、近衛邸（五条大路沿い）、この東に隣接する松殿邸、九条邸（九条大路東洞院）、八条院（八条大路東洞院）、六条殿（六条大路西洞院）や、閑院内裏（二条大路西洞院）では、寝殿、廻廊、車宿などの顛倒の被害が多数出た。

一方、庶民の家屋の被害については、京中の人屋多数顛倒あるいは損壊、東西に面した築垣は殆ど倒壊などの被害が生じたほか、これらによって多数の死傷者が出たことが記録に残されている。

また、市中の左京や白河、東山では地割れが多数起こり、地盤の液状化現象も発生した。

4. 京都盆地周辺の被害

京都盆地西方の御室周辺では、仁和寺境内の円宗寺の廻廊が倒壊しており、また御室双ヶ岡南の法金剛院内の南御堂も倒壊したが、盆地東側に比べて西側での被害は比較的少なかったと思われる。また史料から盆地西縁に位置する洛西善峰寺での被害は軽微であったと判断される。一方、南東側の山科盆地にある醍醐寺では、築地塀の被害が大きく、また付近の東安寺承香殿が倒壊したが、五重塔を含むその他の寺舎の被害はなかった。また、醍醐寺西方の勸修寺では、鐘楼、経蔵、廻廊などが顛倒するなどの大きい被害を生じた。

一方、京都盆地南方の宇治においては、宇治橋が崩壊して橋桁、橋板、欄干などすべてが宇治川に落下し、渡橋中の10余人が川へ落ち、1人が水死した。しかし、この宇治橋に近接する平等院では大きい被害は記録されていない。

また洛南の鳥羽には、当時の離宮であった鳥羽殿の院御所内や周辺に、御願寺や多くの建物が建立されており、相当の被害を生じたと考えられるが、地震によるこれらの建物の損壊の記録は残されていない。

5. 近江における被害

(1) 比叡山延暦寺の被害

平安時代末期の比叡山には、根本中堂をはじめ壮大な堂塔伽藍が標高約650mの平坦地や尾根に立ち並んでいた。〔「吉記」〕などの史料によれば、この地震によって戒壇院八足門、看衣堂、廻廊四面、恵心院、法華惣持院、灌頂堂、真言堂、廻廊など、延暦寺の中心である東塔において壊滅的被害を生じた。このような被害状況は〔「玉葉」〕や〔「愚管抄」〕など他の資料からも裏付けられる。このことは比叡山における地震動が特に激しかったことを示唆する。

(2) 比叡山東麓坂本の被害

比叡山東麓にある坂本の日吉大社では、本殿、拝殿、彼岸所など多数の建物があったと考えられるが、〔「吉記」〕には倒壊した建物としては八王子彼岸所が記載されているのみである。しかし、別の史料「華頂要略」から、坂本の被害については山上坂本堂舎塔廟の多くが大破、顛倒に至ったことが裏付けられる。このほか坂本の町でも大きい被害があったと考えられる。

(3) 琵琶湖西岸南部の被害

琵琶湖西岸南部の長等山東麓にあった園城寺（三井寺）では金堂の廻廊が倒壊したが、その他には被害の記録はなく、また同じくこの西岸南部の石山寺ではこの地震による建物倒壊などの被害記録は残ってない。

6. 琵琶湖沿岸での地変

史料〔「山槐記」〕によれば、この地震に際して、近江琵琶湖の湖水が北流して湖岸が三段ないし五段(33-55m)後退し、後日回復したことや、沿岸の何処かで三丁の土地が水没したことなどが記述されている。このことは地震を発生させた断層運動によって、何処かの沿岸の土地が水没したことを示すものと考えられる。この事実は琵琶湖沿岸において大規模な地変を起こした断層運動を示唆する重要な記述と考えられる。

なお、この地震の27年後の建暦二年(1212年)に書かれた「方丈記」(鴨長明)には、この地震について、“山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地を浸せり。土さけて水わきいで、巖われて谷にまろびいる。”との記述がある。また後に書かれた「平家物語」にも類似の文章がある。この記述が実際にこの地震の際の琵琶湖沿岸や付近の山地の出来事なのかどうかは定かではない。西山(2000)は、この文章はこの時にある場所で起きた現象を正確に表現したものではなく、一般的な大地震や津波などの災害を強調した啓発的記述と考えている。

7. 奈良および大坂における被害

- (1) 奈良興福寺関係の史料には、「七月九日大地震、処々多顛倒」との記述が見られるが、興福寺境内には当時再建途上の建物5棟が存在するのみで、顛倒した建物の具体的名称もないため、この記述は伝聞による一般的な状況を示すものと思われる。
- (2) 唐招提寺では中門や千手観音立像が倒壊したとの記述があるが、これらは当時すでに老朽化が進んでいたためと考えられる。
- (3) 東大寺においては、この地震後の八月二十七日に大仏の開眼供養が無事行われているため、地震によって何らかの大きい被害を生じたとは考えられない。
- (4) 大坂四天王寺においては、史料にこの地震による震動によって「瓦一枚落ちず、樹木一本倒れず」との記述があり、全く被害を生じなかったと思われる。

8. 有感範囲

〔「山槐記」〕によれば、この地震は、美濃、伯耆などからの来訪者の談として「極めて大であった」旨述べられており、現在の岐阜県南部や鳥取県西部で有感であったと考えられる。これらの距離では現在の震度2-3程度と考えられる。

9. 震源地の推定

筆者の西山は以上の述べた各地の被害実態から、震源地の推定を試みている。今回の地震の被害から想定される震度は、京都盆地内の左京、白河、東山地域で大きく、南東側の山科盆地がこれに次ぎ、西側ではあまり大きくなかったこと、さらに比叡山上や東側山麓の坂本で特に大きかったことなどから、震源地は京都盆地より東方にあった可能性が高いと考えている。さらに琵琶湖西岸南部沿岸の土地の沈降を考慮すれば、震源地はこの付近と考えるのが一つの有力な仮説と判断している。

10. 前震と余震

以上の史料には、この延暦京都地震の前震と余震が多数あったことが記録されている。

これらの史料によれば、この大地震の19日前の六月二十日夜に大震動が数回あり、さらに翌二十一日にも有感地震が数回あったことが記録されており、これらは今回の大地震の前震と考えられる。なおこの大地震の余震も多数発生し、当日から3日間は1日数10回、4日目20余度、その後の20日間は1日数回、2か月後においても1日1回程度あり、年内まで継続したと記録されている。

参考文献

京都岡崎魅力づくり推進協議会編、2013、「地図で読む一京都・岡崎年代史」 32pp.

西山昭仁、1998、元暦二年(1185)京都地震の被害実態と地震直後の動静、歴史地震
第14号、19-44.

西山昭仁、2000、元暦二年(1185)京都地震における京都周辺地域の被害実態、歴史地震、
第16号、163-184

西山昭仁、2001、元暦二年(1185)京都地震の被害実態、地球総特集一古地震の研究、104-112

宇佐美龍夫、1996、新編一日本被害地震総覧、434pp.

なお上記の西山論文には、元暦二年(1185)京都地震当時の時代背景についての詳述があるが、この報告ではこの部分は殆ど省略した。興味のある読者は原論文をぜひ一読されることをお勧めしたい。

(追記)

上の西山論文に言及された琵琶湖西岸断層については、近年地質学的・古地震学的な調査研究がおこなわれており、その概要を以下に述べる。

琵琶湖西岸断層系は、7 - 8本の小断層から成る総延長約59 kmの断層系である。このうち中部以南では、北北東-南南西走行の比良断層、堅田断層、比叡断層、膳所断層、および西岸湖底断層などがあり、最長の比良断層の長さは約16km、南部全体の長さは約40kmと見積もられている。これらの断層は何れも地形的には西側が東側に対して相対的に隆起する逆断層である。

最近、これらの断層については地形学的調査のほか、反射法弾性波探査、ポーリング調査、トレンチ調査などが行われ、これらの断層の実態が明らかになって来た(地震調査研究推進本部2003、2009)。

このうち弾性波探査から、堅田断層は深さ3 kmまでは傾斜40度で西側に傾き、深さ3-5 kmでは35度の傾斜で同様に西側へ傾斜する。その最深部は京都盆地よりやや東側の下部まで達している可能性が考えられる。各種の地質学的調査のデータからは、この断層の最新の活動時期は、1060 - 1270年 A.D.の間と見積もられており、西山論文に述べられた1185年元暦地震の発生は、これら最近の地質学的、地震考古学的研究結果を裏付けるものである(Kaneda et al., 2008)。

なお、これらの探査では、1185年地震の際の断層の変位を示すようなずれは見出されていない。

参考文献

地震調査研究推進本部、2003、琵琶湖西岸断層帯の長期評価について。

地震調査研究推進本部、2009、琵琶湖西岸断層帯の長期評価の一部修正追加。

Kaneda, H., H. Kinoshita, and T. Komatsubara (2008) , An 18,000-year of recurrence folding inferred from sediment slices and cores across a blind segment of the Biwako-seigan fault zone, central Japan, J. Geophys. Res. Vol. 113, B5401. doi:10.1029/2007JB005300.

(参考)

1. 比叡山延暦寺－ 堅田断層最南端 間 距離 約 4 km
京都・岡崎 － 堅田断層最南端 間 距離 約 10 km
京都・岡崎 － 比叡断層最南端 間 距離 約 7 km
醍醐寺 － 比叡断層最南端 間 距離 約 8 km

(堅田断層の最南端は仮に比叡辻に、比叡断層の最南端は浜大津北に取っている)。

2. なお最初の第1章に述べた六勝寺のうち、法勝寺、最勝寺、成勝寺、円勝寺の名称は、現在もそれぞれ 京都市左京区”岡崎法勝寺町”などの町名として残されている。

(謝辞) この要約についてコメントを頂いた原論文の著者の現・東大地震研究所・西山昭仁氏、ならびにこの西山論文やKaneda 論文を最初に紹介して頂いた京都大学防災研究所・片尾浩氏に御礼申し上げます。